慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドウラ・エウロポスのミトラス神殿と初期ミトラス教(二)
Sub Title	A survey of the materials from the Mithraeum of Dura-Europos
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1972
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.4 (1972. 4) ,p.75(467)- 96(488)
JaLC DOI	
Abstract	Although the final report of the results of the excavation at the Dura Mithraeum is not published yet, there are found many remarkable materials relating to the history of Mithraism in the Preliminary Report (1939). The art and the inscriptions as well as the circumstances of the dedications of this temple show that there was persisting influences of the religious and artistic "Koine", which established itself in the Semitic parts of the Parthian Empire during the first century B. C. On the other hand, the Dura Mithraeum was founded in one of the most critical period of the Durene history just after the occupation of the city by the Roman army in A. D. 165. So .the dedication must have not been against the will of the Roman military authority, and have followed the Roman usage of the Mithraic religion, which had been already planted on the soil of the Roman Empire by that time. From these observations an important problem arises whether its uniqueness, which seems to come from the "Koine", was merely a local peculiality of the whole system of Roman Mithraism or not. If not, it must represent some traits of pre-Roman Mithraism, which may have been the direct heir of the "Koine", and which did not follow the Roman usage of this mystery religion : it is possible that the first dedicators (the Palmyrene archers) had been initiated into the mystery earlier and brought it with its premitive tradition to Dura-Europos from Palmyra herself or from other parts of Syria before the Roman istion. Although we must wait for the publication of the final report to reach any solid conclusion, the examination of the archaeological data of the Preliminaly Report does not exclude the possibility that in Syria there was the pre-Roman Mithraic mystery, that is, the Mithraism of the period from the time of its founder to that of its Romanisation.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19720410-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドウラ・エウロポスのミトラス神殿と初期ミトラス教（二）

小川英雄

一、序

本稿の目的は、前稿[1]にひきつゞいて、ドウラ・エウロポスのミトラス神殿遺跡のミトラス教史上の位置を考察することにある。[2]既に記した通り、現在までに発表されたドウラの史料を概観する限りでは、ここのミトラス神崇拝の東方起源説を宗全に否定することは出来ない。即ち、イランから西漸して来たミトラス神崇拝がシリアでローマ的密儀宗教として再編成される間の、発生期の信仰の痕跡がドウラの史料中に存在している可能性がある。それはA.D.ノックの云う、[3]マゴス的信仰から非マゴス的信仰への移行段階であつたろう。このような段階は、現在までに知られる史料の内容から推測して、ミトラス神崇拝の密儀的形態とマゴス神官の結びつきの唯一の場であつたシリア以外に求めることは出来ない。そうとすれば、シリアの地のマゴス神官史料のすべてを、ミトラス教密儀から切り離すこと[4]は不適当であると云わなければならない。むしろ、イラン的信仰の密儀への転換と云う質的変化に際して、宗教的指導者としてのマゴス神官の積極的役割、別言すれば、宗教改革者としての活動を想定すべきであろう。[5]イランの救済神ミトラスに対する信仰をもととして、シリアのマゴス神官たちはヘレニズム的救済神話の一つを組織し、会衆を集め、神殿と儀式を設定した。従つて、Cumont

が自ら復元したミトラス神話の起源をイランのマズダ教にさかのぼらせようとしたのは誤りであつたが、[6] E. Will[7] のように、ドウラのミトラス教史料中のイラン的要素のすべてを、単にメソポタミアに接していると云う地理的な理由に帰し、それ以上の積極的意義を認めないことも不適当である。Will によると、ローマ帝国の他の地方では、このようなイラン的性格は嫌われたと云う。しかし、パルティア帝国とローマ帝国との厳しい軍事的対立のうちに残されたドウラのミトラス教史料に最も濃厚なイラン的要素が残されたのは不可解である。Will は既述のように、ドウラのミトラス教は西方から導入されたものと看做したが、[8] それをドウラで支えたローマ軍の兵士たちが、イランの強敵を前にして好んでイラン的要素の採用を行うはずはない。むしろ、ローマ軍の兵士たちはパルミラ系の軍隊によつて行われていた東方的要素の濃いミトラス教をローマ化しつゝ採用したが、イコノグラフィーやマゴス神官の職名などが生き残つたと考えられる。

さて、西方で知られる最初のミトラス神密儀は前一世紀前半、キリキアの海賊の手になるものである。その信仰内容や儀式については判然としないが、救済神としてのミトラス神が信じられていたと云うことを推測させる（Plut., Vit. Pomp. 24）。プルタークは彼自身の時代（A. D. 50-120）頃にも、この密儀が行われていた、と云つているが、前一世紀前半の海賊たちのものと同じ内容であつたと云う保証は何もない。次に知られる早期のミトラス神信仰についての史料は、プルタークとほゞ同時代の詩人スタティウス（A. D. 45-96頃）の詩（P. P. Statius, Theb. I, 719-20）の中にある。そこには、ミトラス神の密儀と云うことばは出て来ないし、信徒や信仰の行われた地方についても具体的言及がない。たゞ、この神が「ペルシアの洞窟の岩はだの下で、あらがう牛の角をねじ曲げる」と云う表現は、すべてのミトラス神殿正面に安置されていた「牛を屠る神ミトラス」の図像のことばによる説明であると考えられる。一般に、スタティウスはこの図像を目撃し、それを詩の中に描写したとされているが、[9] そうではなく、単にミトラス神密儀の牛屠りについての神話について何等かの知識を持つていたゞけたかも知れない。この点で最近 Vermaseren によつて提出された新しい論点に注目[10]

すべきである。それによると、七九年にヴェスヴィウス火山の大噴火によつて埋没した町ポンペイには、長期間にわたる大規模な発掘にもかかわらず、全くミトラス教遺跡が発見されていないのは、ミトラス教の形成時期についての重要な事実である。このことは、当時少くともイタリアにはミトラス教の密儀が存在していなかつたことを示すものであろう。従つて、それは又、ミトラス教自体がまだローマ世界に受容されうるような形をとゝのえていなかつたことを示すものであろう。

この辺の事情はドウラ・エウロポスのミトラス教史料にいかに現われているであろうか。二〇九年から二一一年の間に、中期ミトラス神殿を再建奉納[11]したAntonius Valentinusは、前期ミトラス神殿の担い手であつたパルミラ人騎兵隊を卒いて、皇帝の代官Minicius Martialisの下にあるローマ軍団に参加していたと考えられるが、彼の卒いる騎兵分遣隊が所属した第四軍団スキュティカと第十六軍団は一世紀以来シリアの地で永らく対パルティア帝国の防衛についていた[12]。従つて、ドウラのローマ軍駐留地帯で彼がこのような皇帝のための碑文を刻ませることが出来たことは、そこにローマ軍とその駐留目的について明確な自覚が働いていたことを意味していよう。従つて、そこには前稿において触れた如き東方的要素の残存と共に、ラテン語の使用、神殿の拡張と改修などローマ的ミトラス教への移行がみられる。勿論、初期ミトラス神殿と中期のそれの詳細な相違点、共通点の分析は最終報告書、とりわけF. Cumontの論文[13]の刊行を待たなければならない。しかし、これ等の軍団とそのシリアにおける駐留目的を考えるならば、土着系の軍隊のローマ軍への吸収とそれにともなう東方的土着的ミトラス教のローマ化が、ドウラばかりでなくハウラン地方のシア、アルシャワ・クィバル、タルトウスなどの古拙な傾向を示すミトラス教史料[14]の背後に働いていたことは十分に考えうることであろう。

ところが、実際に残された考古史料をみると、ローマ化を受ける前のミトラス教を示すものははなはだ少い。スタティウスとプルタークによつて「牛を屠る神ミトラス」の密儀が存在したことが分つても、その段階の純然たる神殿やイコノ

グラフィーや信徒組織を知ることが出来ないばかりか、イラン的ミトラス神信仰との具体的な差異も分らない。要するに、ミトラス教を創立したと考えられるマゴス神官の活動を含めて、この段階のミトラス教はローマ化によつて覆い隠されてしまつたのである。

二、ドウラ以外の初期ミトラス教史料

オリエントのミトラス教史料中では、ドウラのものが年代の判明しうる範囲で最も古いことになるが、ローマ帝国各地において発見されて来た同時代の史料を概観し、ローマ化された直後のミトラス教の性格、及びそれとドウラ史料との比較を試みる必要があろう。[15] 以下、年代の古い順に提示し、古いと思われるが年代の確定又は推定し難いものを最後に一括して扱うことにする。又、ここで初期ミトラス教史料とするのは、二世紀のものに限ることにした。なぜなら、コンモドウス帝（一七六―一九二）の死後の混乱の中から生れたセヴェルス朝期（一九三年以後）には史料が急に増加し、もはや発生期のいかなる痕跡をも判別することが不可能なほど全帝国内に定着してしまつたからである。[16] そして、二世紀における発展はコンモドウス帝自身の入信によつて、一種の「キリスト教公認」的段階に入り、全帝国への定着化の基礎がおかれたと考えられる。[16] 以下ラテン語碑文仮訳中の（　）の部分は筆者の補修。

（A）A.D. 一四〇年代

（i）ドイツ Heilbronn 近くの Recking 出土の石製祭壇とその碑文。孤立した遺物。「不滅の太陽神ミトラスに、第八軍団アウグスタの百人隊長D. セッリウス・プロクリアヌスが欣然として奉納した。[17]」第八軍団はシーザーの設立になる古い伝統をもつが、主としてライン・ドナウ両川流域に駐留していた。オリエントとの関係は特になかつた。但し、彼は別の場所（Bockingen）で一四八年に Apollo Pythius 神に祭壇奉納を行つているので、[18] ギリシア的教養のある人物であ

つたことが分る。ミトラス神への奉納年代はこの碑文から後一四八年前後と推測されるが、相当な幅を見込むべきであり、一五〇年代かも知れない。

（B）A.D. 一五〇年代

（ii）パンノニアの Poetovio 出土の碑文と浮彫で飾られた石製台座。当地には少くとも三つのミトラス神殿があり、パンノニア属州では Aquincum や Carnuntum[19] と並ぶミトラス教の中心地であつた。第一神殿はこの地方の関税事務所（publicum portorium Illyricum）で働く奴隷身分の人々によつて支持されていた。「神（ミトラス）を生み出した（聖なる）岩に、地方関税事務所の代官プルデンス・アントニウス・ルフスの代理フェリックスが神のお告げによつて（奉納した[20]）。」神を生み出した岩（petra genetrix）に関するイコノグラフィーは、「牛を屠る神ミトラス」関係のものに次いで、恐らくは「獅子頭神」像と並んで多く発見されているが、このように初期に既にこの神話が存在したことが分る。プルデンスの奴隷身分からの解放者が別の碑文中[21]で一五七年に奉納を行つているので、フェリックスがこの碑文を奉納したのは、それよりしばらく後のことであろう。

（iii）スペイン Merida の未発掘のミトラス神殿出土の諸碑文。この町は前二五年に植民市の資格を得た伝統ある場所で、スペインの比較的少いミトラス教遺跡[22]中出色の史料的価値のある出土物が記録されている。神殿もそこに最初から奉納されてあつた筈の「牛を屠る神ミトラス」の像も発見されていないため、当地におけるミトラス教の創立時期を知ることは出来ないが、大理石製の高価な神像群（ミトラス神又は松明奉仕者、松明奉仕者、獅子頭神、オケアヌス神、ヘルメス神、聖餐式図、セラピス神、ヴィナス神、アエスクラピウス神など[23]）が出土したことは、ローマのサンタ・プリスカ教会地下やロンドンの Walbrook の神殿と似ている上、その大多数が一五五年頃にはミトラス教徒によつて信仰の対象とされていたことが分る点で特に重要である。「アウグスタ・エメリタ＝メリダ）植民市紀元一八〇年（A.D. 一五五年）に、

不滅の神ミトラスの神を生み出す祭壇に、（位階）父ガーユス・アッキウス・ヘデュクルスの手により、第七軍団ゲミナの食料供給官マルクス・ヴァレリウス・セクンドゥスが欣然として（この）奉納品をささげせしめた。[24]」これは大理石製祭壇の碑文であるが、祭壇自体が神を生み出す聖なる岩と同一視されている点でユニークである。ミトラス神の生誕に関する最初期の神話を反映するものであろう。第七軍団はその副称（双生児）が示すように、内部に複合的な分子を含んでいたと考えられる。それは Galba 帝（A. D. 六八／六九年）に創設され、七四年にスペインに進駐するまでの間ローマやカルヌントウムなどに移動したが、オリエントとは直接の関係はない。他の碑文（後記）を考えあわせると、メリダの裕富な信徒集団の中心は、ヘデュクルスなる謎めいた人物であつたが、彼の素性は分らない。彼はミトラス教徒の最高の位階「父の父」(pater patrum) にあり、[25]一般信者と神との間をとりもつ（"curavit"）神官でもあつた。これはドウラに多出する信徒の位階の古さを立証すると同時に、儀式とその際における神官の職分が早くから確立していたことを物語る。このことは、ミトラス神又は松明奉仕者立像に付けられた碑文「不滅の神に（この）神像を、父アッキウス・ヘデュクルスの手によってC. クリウス・アヴィトウスが（奉納した）。[26]」によつても、又後述の幾つかの例（v）（xx）などによつても知ることが出来る。この立像には「デーメートリオス作」なる作者銘がギリシァ語で記されているので、後述のオスティアのもの（iv）と同じく、信徒集団はラテン語を使用するなどの事実が示すようにローマ化されていても、図像製作者は東方系の人物であつたことが分る。次に、大理石製ヘルメス神像の碑文「植民市紀元一八〇年に、不滅の神ミトラスに（この）神像を、父ガーユス・アッキウス・ヘデュクルスが欣然として安置した。[27]」これはヘデュクルス自身がミトラス神以外の神に奉納を行つていることを示す。ミトラス神はコマゲネのアンティオコス一世（六九―三四B・C）の非密儀的墓碑銘[28]において、ヘルメス神と同一視されているが、後者は初期ミトラス教神話中でも重要な役割を占めていたのではないかと考えさせる。

（C）A.D. 一六〇年代

（iv）Ostiaのセプティミウス・セヴェルス帝時代のミトラス神殿に由来する二松明奉持者像の碑文。奉納年代は明白に後一六二年であるので、この神殿で再使用されたものであろう。「この聖所の神官C. カエリウス・エルメロスが自費で製作した。Q. ユニウス・ルスティクスとL. プラウティウス・アクィリヌスの執政官職の年一月一八日に安置。」[29] ラテン語碑文にもかかわらず、エルメロスの語尾はギリシャ語によっているので、彼は東方系の人物で、二世紀中葉にPuteoliに代ってOstiaがローマの外港として繁栄しはじめた時に、[30] 外国から来たのであろう。「この場所の神官（antistes huius loci）」の存在には前出のヘデュクルスの場合と同じ意味あいがあろう。この奉納年代は神殿建立の時期を示すものではなく、メリダの場合と同じように、神殿はそれ以前にあつたと考えられる。エルメロスは又同じOstiaの「壁画付ミトラス神殿」（Mitreo delle pareti dipinte）でも神官であつた。[31] この神殿は考古学的には二世紀後半の建立とされている。[32] この他にも、Ostiaでは考古学的に一六〇―一七〇年創立と考られる[33]「七つの門のミトラス神殿」（Mitreo delle sette porte）がある。これ等の神殿にはミトラス神殿に通有の要素が様々な形で表現され或は出土している。神官（antistes）のラテン名と思われるsacerdos、石製祭壇、「牛を屠る神ミトラス」を中心とする壁画（「壁画付ミトラス神殿」）、石製祭壇、松明奉持者像、ニンフ像、六注口付ランプ、中央通路一面のモザイク床面に描かれたジュピター、サトウルヌス、マルス、ルナ、ヴィナス、ヘレメスなどの諸神や七つのアーチ付門のシンボリズム（互に対応する七惑星、七元要、七位階を示すもの）、「牛を屠る神ミトラス」の神話の一部（甕、蛇、鷲）（「七つの門のミトラス神殿」）などが出土した。壁画の存在は同時代のドウラと共通であるが、その色彩関係の象徴的意味の研究は未開拓の分野である。[34] 総じて二世紀末までにオスティアには少くとも四つのミトラス神殿が存在した。[35] そして、信徒集団には軍人がいない点は、オリエントにおけるミトラス教のローマ化はローマ軍の駐留と云う軍事上の事態に起因したとしても、元来ミトラス教は東方の市民社会にも

侵透していたこと、そして西方への伝導は主として東方系の商業貴族の手によつた[36]ことを推測させる。

（D）A.D. 一七〇年代

（v）Aequi 人の古都 Nersae[37]（北伊）からはミトラス神殿は発見されていないが、「牛を屠る神ミトラス」の碑文付の[38]浮彫像の他に市の下級官吏たちの手になる奉納碑文がある。彼等（arkarius）は地方自治体の配下にある奴隷又は解放奴隷であつた。[39]そして、彼等も又ミトラス教信徒集団の最高位の神官の手によつて奉納を行つた。「不滅のミトラス神に、自治体の官吏アプロニアヌスが奉納品を献上した。マクシムスとオルフィトウスの執政官職の年（A.D. 一七二）六月二五日に父C. アレンニウス・レアティヌスの手によつて奉納した。[40]」「不滅の太陽神ミトラスの祠を、自治体の指導者と民衆の平安のために、自治体の官吏アプロニアヌスが永い間倒壊していたのを指導者たちの許可を得て自費で再建した。[41]」この碑文について更に注意を払うべき点は、アプロニアヌスが奉納品を献上した一七二年には、すでに彼自身による神殿再建が終つていたこと、従つて「永い間倒壊していた」最初の神殿はさらに時間的にさかのぼること（例えば、一五〇年代建立）、並びに、奉納目的を示すフレーズ "pro salute..."（「…の平安のために」）が、Commodus 帝時代以後のように皇帝やその一族をみちびかず、地方都市の市民社会全体を対象としていることである。後者は初期ミトラス教の社会倫理を表わす事実であろう。

（E）A.D. 一八〇年代

（vi）これ以後の遺物はミトラス教徒の皇帝 Commodus（A.D. 一七六―一九二）の治世に属し、皇帝との関係を意識した奉納の行われた時代に入る。史料は急激に増大するが、（v）までの史料には事実上ミトラス教のあらゆる構成要素がすでに存在していることを忘れてはならない。ローマの Aurelianus 帝建立の太陽神殿跡から出土した「牛を屠る神ミトラス」浮彫像の碑文「不滅の太陽神に、ルキウス・アウレリウス・セヴェルスが（この像を）架台並びに台座と共に祈

願をこめて作製した。(a)「太陽神ミトラスに、ルキウス・アウレリウス・セヴェルスが父ルキウス・ドミティウス・マルケリヌスの御高配により奉納した。」[42] (b)これ等二碑文は次の大理石板の碑文によつて、太陽神殿とは関係のないことが分る。「不滅の神をまつるために、ルキウス・アウレリウス・セヴェルスは、父ドミティウス・マルケリヌスの御高配によつて、皇帝陛下コンモドウス(三回目)とルキウス・アンティスティウス・ブッルスの執政官職の年(一八一年)四月に奉納を行つた。」[43]

(viii) ローマの個人蔵大理石製祭壇の二つの碑文[44]。「神官セクストウス・クレウシナス・セクンドウスのお力添えによつて安置された祭壇。(それは彼の)息子たちマクシムスとマクシミヌスが大元帥皇帝陛下にして敬虔・至聖なるコンモドウス(四回目)とヴィクトリヌス(二回目)の執政官職の年(A.D.一八三年)に(神を)まつるためであつた。」「不滅の太陽神ミトラスに、郵便局長M.ウルピウス・マクシムスが、祭壇とその付属品、並びに主(ミトラス神)のしるしをつけた四帖のヴェール(奥室の仕切用垂幕)を、(神を)まつるために奉納物として献納した。」これ等は神官の父子三人の手になるもので、一家をあげての信徒が存在したことの分る史料である。彼等のラテン語の綴りにはあて字がある(inbicto; bela)ので、東方系の一族であろう。この碑文の次に古い碑文については、(xviii)を参照。

(viii) 北阿ヌミディアの軍団駐屯地で、サハラ沙漠に接する交通の要衝 Lambaesis のミトラス神殿(一九五三年発見)は、ロンドンの Walbrook のもの[45]と共に、奥室に丸天井を設えた本格的バシリカ建築による建造物で、共に二世紀末に創設された。少くとも五箇の石製祭壇と六つの碑文が出土したが、その一部は神殿より前に発見された。「不滅の太陽神ミトラスに法務官資格の司令長官M.ヴァレリウス・マクシミアヌスが神像を(奉納した)[46]。」この碑文付石製祭壇を奉納した人物は(x)のサビヌスと共に、初期ミトラス教徒のうちでは、知られる限り、最も身分の高い人物である。他の碑文により、彼は上述(ii)の碑文によつて早くからのミトラス教流行地であつたパンノニアの Poetovio 出身の生粋の軍人であ

り、一八三―一八五年には、一世紀末から Lambaesis に駐留していた第三軍団アウグスタの司令長官であつた。彼は又、ダキアのミトラス教[47]の一中心地 Apulum でも、トラヤヌス帝のダキア戦争以来そこに駐留していた第一三軍団ゲミナの司令長官として、ミトラス神に奉納を行つた（ix）。従つて、このような高位の軍人がかなりの期間変らぬミトラス神への信仰を保つていたことが分る。しかし、彼のミトラス教徒としての活動は、この密儀がローマ帝国に根づいた後に、恐らくは Poetovio で学びとられたものであり、東方世界からの布教の直接的な立役者ではなかつた。彼はコンモドウス帝時代の「ミトラス教公認」を代表し、全ローマ帝国へのその勢力拡大を促進するのに功績があつた人と云うべきである。

（ix）ダキアの Apulum（Alba Julia）には南北二つの集落が発展した。南部の Mureş Port は一般居住区（canabae）であつたが、マルクス・アウレリウスの時に自治都市権を与えられ、一八〇年には植民市となつた。要塞に接する北部・東部・東南部はローマ軍人の所領（vicus）であつたが、S. Severus の時に自治都市権を与えられ、Decius 帝の時に植民市となつた。両地からは「牛を屠る神ミトラス」像、獅子頭神像、祭壇など多数のミトラス教遺物が発見された他、少くとも一つのミトラス神殿の痕跡が見出された。但し、出土記録不十分なものが多い。年代の判明する碑文中最古のものは vicus 出土の碑文、「不滅の神ミトラスに、司令長官 M. ヴァレリウス・マクシミアヌスが奉納した。[48]」この碑文付祭壇の奉納者は（viii）と同一人物で北アフリカでも同様な碑文を残した。

（x）Aprum の Mureş Port 出土と伝えられるが、M. J. Vermaseren は奉納者が軍人であつたことから、vicus 出土の可能性も認める石板の碑文。「不滅の太陽神に、第一三軍団ゲミナの司令長官 C. カエレッリウス・サビヌスが神殿を復興した。[49]」他の碑文によつて、サビヌスが司令長官であつたのは A. D. 一八三―一八五であつたことが分るが、それは彼の前任者又は後任者のマクシミアヌスが Lambaesis でミトラス教徒の司令長官であつたのと同時期である。このような前後の事情から、当該碑文にはミトラス神の名前が出ないにもかかわらず、又孤立した遺物であるにもかかわらず、「不

滅の太陽神」の称号の下にミトラス神が理解されていたと認めうる。サビヌスは神殿を復興したと記しているので、ミトラス神殿の当地における設立はA.D.一七〇年代又はそれ以前にさかのぼるであろう。従つて、これ等高位の軍人たちは、コンモドウス帝による「ミトラス教公認」にともない、民間人が当地に創立したミトラス神殿を継承発展させたのであろう。

(xi) ライン川左岸下ゲルマニアのローマ軍団駐屯地Veteraは同川流域のミトラス教流布地のうち最も北に位置するが、そこの近くからはミトラス神に奉納された二ケの祭壇と一ケの台座が発見された。その一つの祭壇の碑文に、「不滅の神ミトラスに、第三〇軍団ウルピア・ヴィクトリックスと第二二軍団プリミゲニア・ピア・フィデリス所属の百人隊長M.ユリウス・マルティウスが、両シラヌスの執政官職の年(A.D.一八九)に(奉納した)[50]。」第三〇軍団はトラヤヌス帝によつて設立されて以来、ドナウ川方面で戦つたが、一一九年以後はVeteraに駐留した。第二二軍団も、カリグラ帝による当地での設立後、ライン・ドナウ両川流域で転戦した。従つて、奉納者はオリエントとは間接的な関係しかない。

(xii) 北アフリカのSitifis西方のAïn-Tekriaの大理石板の碑文。「不滅の太陽神ミトラスに、我々の主君大元帥カエサル皇帝陛下L.アウレリウス・コンモドウス・ピウス・フェリックスの平安のために、アウレリウス(脱落箇所)が子等と共に欣然として奉納した[51]。」コンモドウス帝の治世の奉納(一八〇—一九二年)。これは、"pro salute(m)"形式の碑文であるが、皇帝のためのものである点で、(v)の地方自治体のためのものと著しいコントラスをなす。このことは、コンモドウス帝時代のミトラス教を象徴する。

(F) A.D.一九〇年代

(xiii) 十八世紀末発見の記録不十分の一ミトラス神殿(オスティア)から、「牛を屠る神ミトラス」丸彫像、獅子頭神像

二体、碑文が出土した。獅子頭神像の一つに付けられた碑文「父C．ヴァレリウス・ヘラクレスと（二人の）神官カーユス・ヴィタリスと同ニコメスとが自費で（この像を）安置した。大元帥コンモドウス（六回目）とセプティミアヌスの執ス・ヴァレリウ政官職の年（A．D．一九〇年）八月十三日に献納された。」[52] コンモドウス帝時代に入つて、軍人の手になるやや単調な奉納（及びその背後にあるやや単調な宗教生活）が増加しつゝあつたが、それと並んで民間人の手によつて複雑な神話体系が持続されていたことが分る。奉納者は三人共かつて同じ主人の手によつて奴隷身分から解放されたのであろう。更に、上の遺物と一緒に発見されたと推測される碑文「父にして大神官のC．ヴァレリウス・ヘラクレスが神の尊いお告げによつて不滅の太陽神ミトラスの宮廷の祠をM．アウレリウス（文未欠除。De Rossi の補修では、皇帝陛下コンモドウス・アントニヌスを追加）によつて、彼自身にゆだねられ…。」[53] この破損した碑文は、ミトラス教の高位の民間人聖職者と宮廷の関係を知ることが出来るので重要である。第一に留意すべき点は、上出 Aïn-Tekria のもの（xii）は地方属州で皇帝に対する忠誠又は敬意の表現としての奉納であつたが、これはミトラス教の神官と宮廷の間の直接的な宗教的関係を示すことである。第二には、宮廷の祠の解釈が問題となる。Cumont はこれを Ostia の浴場のこととしたが、[54] Beaujeu はローマの宮廷そのものを指すと考えた。[55] しかし、最新の研究では、Ostia の皇帝離宮のことである。[56] いずれにせよ、皇帝のまわりにミトラス教徒が出入し、皇帝自身も入信し、そこに神殿を中心とする信徒組織が確立されたことは、後三世紀のローマのサンタ・プリスカ教会地下の神殿[57]を先駆するものである。

（xiv）北阿マウレタニアの古都 Volubilis は、ユバ二世の頃から繁栄した町であつたが、四四年頃からローマの自治都市権を得た。ここからミトラス神に捧げられた二つの祭壇と儀式の際に捨てられた獣骨残骸が発見された。帝国最西端のミトラス教痕跡の一つである。一祭壇の碑文に、「不滅（の神）に大元帥カエサル陛下、ローマ人のヘラクレス・ルキウス・アエリウス・アウレリウス・コンモドウス・ピウス・インヴィクトウスの平安と健康のために、（又）彼の帝国のため

に、駐ヴォルビリスのブリトン人の強力な駐兵分遣隊の百人隊長アウレリウス・ネクトレガが自費で奉納安置した。[58]」この碑文は不滅の神に捧げられているが、その背後にミトラス神が理解されていたことは、同一奉納者による同じ場所に由来する碑文に[59]「不滅の神ミトラス」が出るので分る。ミトラス神の名前が省略された理由は、この碑文の奉納された一九一年におけるコンモドウス帝の精神的混乱に見出すことが出来る。即ち、皇帝晩年の専政君主化は死の前年にいたつて逐に宮廷の腐敗と皇帝自身の発狂へとつき進み、宮廷は妾や廷臣に壟断され、ローマは「コンモドウス記念植民市」と改名され、皇帝は「ローマ人のヘラクレス」と自称し、斗剣士として公衆の前に姿を現わした。この事態は北アフリカの西端でも直ちに知れわたり、ミトラス教徒がそれを祝つて碑文奉納を行つた。しかし、皇帝はローマ人のヘラクレス神の名の下に独裁権を行使していたので、ミトラス神の名前を使わず、皇帝自身の称号の一つとして採用されたインヴィクトウス（不滅）だけを残したと考えられる。コンモドウス帝のミトラス教への入信と「ミトラス教公認」、それにともなう宮廷へのミトラス教の導入[60]が、帝権のオリエント的専政化と権力者の精神錯乱とどのような関係にあつたのかを裏づける史料はない。コンモドウス帝の個人的性向を別として、上述のように最初から組織化されていたミトラス教の側に或る種の神権政治理論[61]があり、それが上述（viii）の父・大神官 C. ヴァレリウス・ヘラクレスの影響下に皇帝によつて採用されたのではないかとも考えられる。[62]勿論、Volubilis のローマ兵にとつては、この事態はもつと簡単に受けとられ、"pro salute" 形成の碑文により、改めて皇帝と専政的帝国への忠誠を表明したのにすぎなかつたであろう。

（xv） オスティアの一ミトラス神殿（Mitreo della planta pedis）は、ローマのサンタ・プリスカ教会地下のものと同じように、ハドリアヌス帝時代以来の建物を利用しているが、そこからは碑文付大理石板、「牛を屠る神ミトラス」浮彫、水盤などが出土した。神殿床面の主要部分は幾何学文様や蛇や片足の足跡などを描いたモザイクで覆われている。"Pro salute" 形式の皇帝のための奉納碑文やヘルメスと云う人物によるシルヴァヌス神への奉納碑文の他に、円形の大理石製

水盤の碑文に、「不滅のミトラス神に、マルクス・ウンビリウス・クリトンが農園の管理人ピュラデスと共に奉納品を献上した。」[63] 農園管理人（vilicus）の仕事はイタリアに来た東方系奴隷身分のものの一つの落ちつき先であつた。[64] 従つて、東方系商人[65]の他にも、東方系の民間人でミトラス教の西方への導伝に何等かの役割を演じた者がいたであろう。クリトンも同じような境遇にあつたが、M. ウンビリウス・マクシミヌスの手で解放された人物であつたことが別の碑文で分る。[66] そして、マクシミヌスは一九二年にオスティアで、回船業者の団体の世話人であつたから、クリトンの碑文はその頃のものと推定される。クルトン自身は、もしオスティアの別のミトラス神殿（トラヤヌス帝時代の浴場址に建てられた神殿）[67] 出土の大理石製の特異な「牛を屠らんとする神ミトラス」丸彫像のギリシァ語作者銘（「アテーナイ人クリトーン作」）[68] がこのクリトンを指しているとすれば、ミトラス教徒の彫刻家であつたろう。

（xvi）　パンノニア属州の Stix-Neusiedl（ウィーンの南方）の一ミトラス神殿から、二つの「牛を屠る神ミトラス」浮彫像、祭壇が出土したが、一大理石製祭壇の碑文に、「不滅の神に神像を、大元帥 L. セプティミウス（セヴェルス）の平安のために、古くから倒壊していた神殿をヴァレリウスとヴァレリアヌスが自費で再建した。」[69] セヴェルス帝の治世は一九三～二一一年であるが、同じ神殿出土の「牛を屠る神ミトラス」浮彫像の碑文[70]によつて、奉納者たちの活動は彼の治世の後半であつたと推定され、又同時に、地方の皇帝崇拝とミトラス教との密接な関係が知られる。ミトラス教はコンモドウス帝晩年のローマ又はオスティアの精神的混乱にもかかわらず、セヴェルス朝になると地方の皇帝崇拝を通じてますます体制化する一面を持つていたことが分る。奉納者たちがそのような意図で再建した神殿は、既に後一八〇～一九〇年代に存在していたであろう。

（xviii）　ローマ出土の孤立した獅子頭神像台座の碑文「不滅の神太陽神ミトラスに、皇帝陛下の解放奴隷マルクス・アウレリウス・エウプレペスが彼の息子たちと協同で、神官カルプルニウス・ヤヌアリウスの手で奉納品を献納した。大元帥

T・セプティミウス・セヴェルス・ペルティナックス（二回目）とデキウス・クラウディウス・セプティミウス・アルビヌス（二回目）の執政官職の年（一九四年）四月二五日に受納された。[71]」奉納者エウプレペスは皇帝の解放奴隷であるが、次の大理石片の碑文によつて、遅くともコンモドウス帝の初期以来のミトラス教徒であつたことが分る。「不滅の太陽神に、皇帝陛下の解放奴隷マルクス・アウレリウス・エウプレペスが父ヴィクトリヌスとヤヌアリウスの御高配によつて、神のお告げにもとずき祭壇を安置した。ルキウス・エッギウス・マリュッルスとグナエウス・パピリウス・アイリアヌスの執政官職の年（A.D. 一八四）六月五日に受納された。[72]」エウプレペスはその名前自体によつても、ラテン字の綴りの誤り（Bictorino）によつても、東方のギリシア世界の出身者であることが分る。彼を解放した皇帝はマルクス・アウレリウスかその子コンモドウスである。彼は皇帝の身辺にいたミトラス教徒としては最も古い人物であろう。彼が奉納した二つの碑文の間には一〇年の才月が流れているがその間にミトラス教徒の皇帝コンモドウスの破局が起つた。両碑文を比較してみると、そこにはこの一〇年間の変化が反映されているように思われる。第一に、一九四年には彼の息子たちが奉納者に加わつて、世代の交代期に入りつゝあることを示している。第二に、位階「父」のものによる奉納者と神と神の間のとりつぎと云う形で儀式が行われたことを示す表現は、[73]上述の諸碑文で見る限りでは一八〇年代前半までの最初の約三〇年間に集中し、エウプレペスの一九四年のものが唯一の例外である。これは恐らくその当時のミトラス教徒の間で古拙に感じられた表現であつたろう。第三に、父ヴィクトリヌスが去り、無冠無位のヤヌアリウスが多分奴隷身分から解放されて神官（sacerdos）になつたことである。これは一般信徒の側ばかりでなく指導者側にも世代交代があつたことを示す。第四に、一八四年の奉納より一年前の奉納（vii）にも、誤つたラテン語の綴り方と一家をあげての信仰がみられるが、これはローマの初期ミトラス教徒が東方系の家族単位の居留民を中心としたことを示す。

（xix）アクインクムは下パンノニアの首都でティベリウス帝時代からの軍団駐屯地であり、その北にはS・セヴェルス

時代に植民市となつた町が発達した。そこからは少くとも五つのミトラス神殿が発見されたが、そのうち第三神殿の存在は五つの碑文付祭壇、モザイク床面で確認された。この神殿は富豪の邸宅の一部を利用したものであつた。祭壇の一つの碑文、「不滅の神に、アクインクム植民市の元老（decurio）カーユス・ユリウス・ヴィクトリヌスの平安のために、（彼の）解放奴隷カーユス・ユリウス・プリムスが、サトウルニヌスとガッルスの執政官職の年（A. D. 一九八）四月二二日に、神像を欣然として奉納した。」[74] 奴隷身分からの解放を感謝した“pro salute”形式の奉納である。ミトラス神の名はないが、プリムスは「神を生む岩」への奉納碑文を出土させた第一ミトラス神殿でも祭壇の奉納をしているので[75]、彼はミトラス教徒であつたと考えられる。アクインクムのミトラス教社会は一般的にミトラスの名を避ける傾向があるが、その理由は分らない。ヴィクトリヌスの解放奴隷の中には、他にもミトラス教徒がいた[76]。

（G）その他

（xx）テーベレ川右岸出土の孤立した大理石製台座の碑文、「不滅の太陽神ミトラスに、我々の主君皇帝陛下コンモドウス・アントニヌスの平安のために、M. アウレリウス・ステルティニウス・カルプスが陣営の取締官である父カルプスと兄弟ヘルミオネウスとバルビヌスと協同で幸いにも奉納した。」[77] ここに出る人々が血縁関係にあるのか、信徒集団の中の身分上の称号を記しているのかは明瞭でない。しかし、両カルプスの関係から四人は一族であつた可能性が強い。父カルプスはローマ軍陣営付の奴隷であつた。年代はコンモドウス帝の統治期間以上には特定出来ない（A. D. 一七六―一九二）。

（xxi）ローマ出土と伝えられ、現在大英博物館にある「牛を屠る神ミトラス」の丸彫像付碑文は孤立した遺物である点が、その史料的価値の判定に際して致命的である。彫像自体にも年代不詳の補修の痕跡（ミトラス神の右手と左手一部を除く上半身、牛の角、耳、鼻、松明奉持者 Cautes の左手）がある。碑文は、「T. クラウディウス・リヴィアヌスの奴

隷で農園管理人アルキムスが太陽神ミトラスに欣然として奉納した。[78]」リヴィアヌスがトラヤヌス帝時代の親衛隊長であつたと云う推理が成り立つと、奉納年は一〇二年となるが、[79]このような推理によつて、このようなとびはなれた年代を認めることは危険である。[80]アルキムスが奉納を行つた時と彼の主人が親衛隊長であつた時とが一致しなければならないと云う理由はない。従つて、上の推定を認めるとしても、アルキムスのミトラス教徒としての活動はもつと後のことかも知れない。

(xxii) ローマ出土と伝えられる孤立した石製祭壇の碑文、「不滅の太陽神ミトラスに、マエキアヌス家の農園管理人ヴィクトルが奉納品を献納した。そして、神官M. ストラッキウス・ルフスの手によつて、奴隷身分の同僚ヘルメテスの御高配で、アウレリウス・コンモドウスが執政官職の年四月七日に受納された。[81]」奉納のとりもち役の神官や同僚の世話人の存在は、早期の年代を考えさせるが、執政官職年表から算出される二つの年、即ち、A・D・一五四年と同一七七年のどちらも早期であるため、どちらかを確定することは出来ない。(xxi)と(xxii)の農園管理人と云う地位については、上出(xv)参照。

三、要　説

ドウラとパルミラ以外の初期ミトラス教史料の概略は以上の通りであるが、そこから看取される特色をまとめ、ドウラ・パルミラ史料との比較の基礎としたい。

年代上確実に云えることは、ミトラス教密儀はまずローマ帝国属州と繁栄しはじめた港町オスティアに、二世紀中葉に突然現われることである。量的にはコンモドウス帝の治世の後半に急増する。以下においては、増加の傾向を考えて、二世紀を第一期＝A.D. 一五〇—一八〇と第二期＝A.D. 一八〇—二〇〇とに分けて考察した。分布地域を見ると、第一

期にすでにゲルマニア、パンノニア、スペインの軍団駐屯地や植民市及びオスティア、ローマ、ネルサエなどのイタリアの都市に広がつており、第二期にはこれに北アフリカやダキアが加わるにすぎない。従つて、伝導の速度はきわめて速かつたと云える。信仰内容をみると、第一期においてすでにミトラス教史全体を通じて看取される主要な特性が備わつていたことが分る（ミトラス神の存在、獅子頭神像、神を生み出す岩など）。神殿の構造も同様である。但し、第一期には、他の神々に対する吸収の努力が明白に現われているのに対し、第二期ではそれが消えて、より単調な外観を示し、同時に皇帝崇拝や宮廷との結びつきが強まる。信徒組織を見ると、第一期においては神と信徒のとりつぎ役としての神殿管理者（神官）と高い位階にある信徒の役割が大であり、奉納が彼等によつてとりつがれることに大きな関心が払われていたことが、奉納年月日の正確な記述によつて分る。後には七位階あつたことが知られる信徒組織のうち、両期を通じて「父」のみ現われることは重要である。信徒の社会的身分としては、奴隷身分出身の市民が圧倒的であり、彼等の名前やラテン語の用法などから東方のギリシア語世界が彼等の故郷であつたことは明らかである。彼等の奉納物の内容は主として祭壇や神像であつたが、時としては神殿自体の修復もあつた。彼等はしばしば自ら語つているように、奉納費用のすべてを自費でまかなえるだけの資力があつた。彫像製作者も東方系の人々であつた。軍人はとりわけ第一期において伝導に積極的役割を演じたかどうか疑わしい。第二期においても、彼等の関心は皇帝崇拝的側面にとどまつたのではないかと思われる。又、軍人のミトラス教徒と東方とを結ぶきずなは存在しないように見える。（未完）

註

（1）史学、Vol. 44, No. 2, 1972, pp. 1ff.; 宗教研究、Vol. 45, No. 3, 1972, pp. 60f.

（2）しかしながら、前稿を印刷にまわした後、一九七一年七月に英国マンチェスター大学において開催されたミトラス神信仰史の国際学会で、E. D. Francis（Yale University), New Light on the Mithraic Graffiti from Dura-Europos と云う研究発表が行われたことが分つた（松山商大星野陽助教授の御厚意による）。そのテーマから見て、この神殿の碑文史料には、現代ミトラス教研究の最も重要なポイントが隠されている

と考える筆者にとつて、最終報告書の刊行に対する期待をますます大きくさせるものがあつた。それ故、前稿を校正刷の段階で若干修正し、本稿の執筆方針も変更することとした。Francis氏の発表のレジュメの内容を要約すると次のようになる。

イエール大学に保存されている未刊行の刻線碑文史料には、なお重要なものが相当残されている。ドウラのミトラス神殿発掘に参加したF. Cumont（上掲史学の拙稿 p.12）は、一九四七年春に最終報告書用の原稿を完成し、その死（同年八月）の直前にイエールに発送した。その論文中で、彼は神殿のフレスコ画や刻線碑文について詳細なコメントをなし、神殿の構造とそこで演じられた儀式の関係に筆を進めている、と云われる。彼はとりわけ、碑文中の宗教用語（信徒の位階名や儀式用語：syndexios, iunctio dextrarum, nymphos, kryphios, magos, sophistēs, stereōtēs, akeraios, nama, habros leōn など）を検討し、それ等と神殿のフレスコ画との関係に説き及び、最後に有名な「火の気息」碑文の再解釈を行う。Francis氏はこの未刊行論文に従つて、ドウラの碑文を論じたようである。

上述の国際会議の報告は星野助教授、オリエント、Vol. 14, No. 2, 1972 参照。又、筆者による短い紹介は、オリエント Vol. 13, Nos. 1/2, 1970, p. 42 にある。

（3） 拙稿、宗教研究、Vol. 42, No. 1, 1969, p. 98 参照。

（4） E. Will, Le relief cultuel gréco-romain, 1955, p. 160f.

（5） このような現象は当時のシリア・パレスティナにおいて孤立したものではなかつた。他にもさまざまなマゴス神官（katēgētēs）が活動していた。拙稿、西南アジア研究、No. 22, 1971, pp. 30f. 参照

（6） S. Wikander, Études sur les mystères de Mithra I, Årsbok, Lund, 1950, p. 28.

（7） Will, op. cit., p. 161, n. 1.

（8） 上掲史学、p. 3.

（9） 例えば、J. M. C. Toynbee, art. Mithras, Oxford Classical Dictionary, 1970.

（10） M. J. Vermaseren, Mithras de geheimzinnige god, 1959, p. 23.

（11） 上掲史学、p. 15 参照。

（12） 第四軍団は九年からモエシアに駐留していたが、多分五五年以後はシリアに常駐した。その痕跡は、ミトラス教遺跡の残されている（宗教研究、Vol. 42, No. 1, pp. 104-106）ハウラン地方にも見出されている。第一六軍団はヴェスパシアヌス帝によつて設立され、カツパドキアに駐留したが、トラヤヌス帝のパルティア遠征に際してシリアに移動し、ハウラン地方北部の Phaina（Mismiyé）に駐留した。後に北上し、コマゲネに移つた。Cf. D. Sourdel, Les cultes du haurán à l'époque romaine, 1952, p. 9.

（13） 註（2）参照。

（14）宗教研究、上出、p.102-108 参照。シドン出土の史料は極めて重要なものであるが、碑文の年代が確定されない（一八七／八年か二八九／九〇年か）ので、後出ローマ出土の T. Livianus の奉納物（pp.90f.）と共に、保留せざるを得ない。もし、これ等二つの丸彫の「牛を屠る神ミトラス」の像が二世紀のものであれば、軍隊の世界以外でも西方化が起つていたことを示すものであろう。

（15）このような研究のために、私は既に方法論的問題を提起しておいた（宗教研究、Vol. 43, No. 3, 1971, p. 27）。そのためには神殿の諸発掘レポートの方法論的再検討から編年の確立に進む必要があるが、本稿では年代確定（又は推定可能な碑文史料のみ）をとりあげた。

（16）Commodus 帝とミトラス教の関係については、F. Cumont, Mysteries of Mithra, N. Y., 1956, pp. 83f.; 38; J. Beaujeu, La religion romaine à l'apogée de l'empire I, 1955, p. 384. 又、後述八二頁以下参照。

（17）M. J. Vermaseren, Corpus Inscriptionum et Monumentorum Religionis Mithriacae（以下 CIMRM）, 1956/60, II, 1295＝CIL XIII, 6477; cf. F. Cumont, op. cit., pp. 38; 50.

（18）CIL III, 6469.

（19）Cumont, op. cit., pp. 46-49 参照。

（20）CIMRM II, 14490＝CIL III, 14354-30.

（21）CIL III, 1568.

（22）Cumont, op. cit., p. 59.

（23）CIMRM I, 772-796 参照。

（24）A. Garcia y Bellido, Les religions orientales dans l'espagne romaine, 1967, p. 27, No. 1＝CIMRM I, 793.

（25）「ガーユス・アンキウス・クデュクルス、父の父」（Garia y Bellido, op. cit., p. 28, No. 4＝CIMRM I, 779.）

（26）García y Bellido, op. cit., p. 28, No. 3＝CIMRM I, 774.

（27）García y Bellido, op. cit., p. 27, No. 2＝CIMRM I, 781.

（28）CIMRM I, 32: IIA, 55.

（29）CIMRM I, 255＝CIL XIX, 58f.

（30）Cf. Cumont, op. cit., p. 65.

（31）CIMRM I, 269:「この聖所の神官 C・カエリウス・エルメロスが自費で建立した。」

（32）G. Becatti, Scavi di Ostia II, i, Mitrei, 1954, pp. 59ff.

（33）Ibid., pp. 93ff.

（34）他に壁画付のミトラス神殿として、カプアやローマのサンタ・プリスカ教会地下のものがある。

（35）Cumont, op. cit., p. 38.

（36）E. Will, op. cit., p. 395.

（37）Cumont, op. cit., pp. 38; 71 参照。

（38）CIMRM I, 650f.「自治体官吏アプロニアヌスが自費で安置す。」

(39) Cumont, op. cit., p.76 参照。
(40) CIMRM I, 647=CIL IX, 4109.
(41) CIMRM I, 648=CIL IX, 4110.
(42) CIMRM I, 409=CIL VI, 726; 30821.
(43) CIMRM I, 410=CIL VI, 725.
(44) CIMRM I, 563=CIL VI, 746.
(45) W.F. Grimes, The Excavations of Roman and Mediaeval London, 1968, esp. p.98 参照。
(46) CIMRM II, 138B. 尚、殆んど同文の碑文がもう一つ奉納されている (ibid., I, 137; II, 137)。
(47) Dacia 地方への東方人とその宗教の流入の背景については、Cumont, op. cit., pp.44f. 参照。
(48) CIMRM II, 1950=CIL III, 1122.
(49) CIMRM II, 1968=CIL III, 1111.
(50) CIMRM II, 1005=CIL, XIII, 8640.
(51) CIMRM I, 152.
(52) CIMRM I, 313=CIL XIV, 65.
(53) CIMRM I, 315=CIL XIV, 66.
(54) Cumont, Textes et monuments figurés relatifs aux mystères de Mithra, II (1896), No.139.
(55) J. Beaujeu, op. cit., p.385, n.4.
(56) M.F. Squarciapino, I culti orientali ad Ostia, 1962, p.56.
(57) M.J. Vermaseren, Mithras (op. cit.), p.34.
(58) CIMRM I, 161.
(59) Ibid., 160.
(60) 上述七八頁参照。
(61) 上述八二頁参照。
(62) この宦廷出入の神官の名前とコンモドゥス帝の一九一年の称号ローマ人のヘラクレスとは無関係であろうか？
(63) CIMRM I, 275=Becatti, op. cit., p.83.
(64) Cf. Cumont, Mysteries of Mithra (op. cit.), pp.70f.
(65) 諸碑文中の奴隷身分、解放奴隷、東方系の人物などの大部分は商業に従事するか、していたかであろう。
(66) CIL XIV, 177 et 251.
(67) Becatti, op. cit., p.29s.
(68) CIMRM I, 231.
(69) CIMRM II, 1661=CIL III, 4540.
(70) CIMRM II, 1659=CIL III, 4539.「不滅の神太陽神〝トラスに、我々の皇帝陛下たちL. セプティ〝ウス（・セヴェルスとカラカラ）の平安のために、カルヌントゥム植民市の（皇帝奉讃）六人委員会のヴァレリウスとヴァレリアヌスとが欣然として奉納した。」六人委員会は別称 augustales で、皇帝崇拝のための市民団体である。カルヌントゥムは一九三年の S.・セヴェルス帝即位の地であり、そのことのために、彼の治世中にこの町は植民市の資格を得た。この碑文は地方属州での皇

帝崇拝の中心人物たちがミトラス教徒として皇帝のために“pro salute”形式で奉納を行つた最初の例である点で、甚だ重要である。カラカラが養父 S. セヴェルス帝と共同統治者（アウグストゥス）となつたのは一九八年なので、奉納の年代は後一九八―一年であろう。

（71） CIMRM I, 526＝CIL VI, 724.

（72） CIMRM I, 527＝CIL VI, 723.

（73） 上述八〇頁参照。

（74） CIMRM II, 1760＝CIL III, 14347.

（75） CIMRM II, 1748.

（76） CIMRM II, 1759＝CIL III, 14344-6 (C. Iul. Ingenus).

（77） CIMRM I, 510＝CIL VI, 727.

（78） CIMRM I, 594; II, 594＝CIL VI, 30728.

（79） Cumont, Textes et monuments (op. cit.), II, 468, No. 69; id., Mysteries of Mithra (op. cit.), p. 38; Vermaseren, Mithras (op. cit.), p. 23.

（80） Cf. S. Wikander, op. cit., p. 24. 又、註（1）宗教研究の拙稿参照。

（81） CIMRM I, 564＝CILVI, 745.